

絶対文感【附録篇】

おさらい

陽羅 義光

予習も大切だが、復習も大事。
せっかく学んだ事を、忘れてしまうのは勿体ない。
そこで私は、書く前に必ずお浚いをする。
おはらい、ではなく、ひとさらい、でもなく、おさらい、である。
先人たちの貴重な言葉を、再度再々度声に出して読んで、自分自身に植え付ける。
それから徐に書き始める。
慌てる事はない。
原稿取りが別室で待っているわけではない。
いや万一待っていたなら、焦らせてみるのも一興か。

私にとって、お宝とも言うべき、先人たちの貴重な言葉は、十や二十ではない。

だから、全部お浚いするわけではなく、せめてそのうちの十分の一か百分の一くらいを、選ぶのである。

選び方は、そのときによって異なり、手元にある本を選ぶときもあるし、すでにノートに書き写してあるものの中から無差別に選ぶ事もあるし、今回はどうしてもあれをお浚いしたいと、わざわざ図書館まで足を運ぶ事もある。

さらに、先人たちの文章を読みつつ感じ纏めた、拙論、
「未使用十箇条」
を再度復唱することもある。
これは、自分でもうっかりして使ってしまう事のあるものを列記してあるので、何度復唱してもよい。

「未使用十箇条」
と名づけたかったからそうただけで、本質的には、あるいは個人的には、
「不必要十箇条」
というほうが正しい。
久し振りに復唱してみよう。
疲れるから、理屈の部分は外して、十の項目といくつかの例のみ。

- 一、月並みな比喻
（「ような」「ように」の多用）
- 二、平凡な形容詞
（「赤い太陽」「青い空」など）
- 三、ありふれたオノマトペ
（「ははは」「トントン」など）
- 四、アルファベットやカタカナ
（「Dさん」「K町」などと「英文字」「カタカナ」の多用）
- 五、罫線及び疑問符・感嘆符
（「…」「?」「!」の多用）
- 六、近代文学的代名詞
（「彼」「彼女」の多用）
- 七、露骨な感傷語
（地の文で「悲しい」「寂しい」）
- 八、古くさい接続詞や副詞
（「したがって」「ようするに」など）
- 九、曖昧な観念語
（「思念の帳が蠢いた」風なもの）
- 十、愛という語
（「愛」の他に「恋」「詩」「心」など）

当たり前といえば当たり前だが、これがあんがい意識していないと難しい。

なにせ書きやすいから、

「豚のように食う」

とか、

「空は青かった」

とか、

「はははと笑った」

とか、

「扉をドンドン叩く」

とか、

「Y町のAさんに会う」

とか、

「ソフトにジャンプした」

とか、

「なに？なに！なに…」

とか、

「ぼくは寂しくて悲しかった」

とか、

「心が愛でいっぱいになった」

とか、

「心底に永遠の予兆が屹立した」

とか、

「要するに彼と彼女は恋人同志だ」

とか、ついつい書いてしまう。

書いてしまったのは仕方ないとして、推敲、吟味、校正のときなどに、

「月並みな用語ではないか」

「安易な文章ではないか」

などをチェックするといいだろう。

さて今日は、新作を書き始めるにあたって、こんな言葉を復唱したものである。

○まずは志賀直哉の言葉。

【芸術上で内容とか形式とかいう事がよく論ぜられるが、その響いて来るものはそんな悠長なものではない。そんなものを超絶したものだ。自分はリズムだと思ふ。響くという連想でいうわけではないがリズムだと思ふ。

このリズムが弱いものは幾ら「うまく」出来ていても、幾ら偉そうな内容を持ったものでも、本当のものでないから下らない。小説など読後の感じではつきり分かる。作者の仕事をしている時の精神のリズム—問題はそれだけだ。

マンネリズムがなぜ悪いか。本来ならば何度も同じ事を繰り返していればだんだん「うまく」なるから、いいはずだが、悪いのは一方「うまく」なると同時にリズムが弱るからだ。精神のリズムが無くなってしまふからだ。「うまい」が「つまらない」と云う芸術品は皆それである。幾ら「うまく」ても作者のリズムが響いて来ないからである】

この文章は他でもよく引用するけれども、この「リズム」がなかなか簡単ではない。

むろん精神のリズムだから、私的な精神力の維持と継続が大事なのだが、肉体力が弱まると、維持も継続も困難になる。

精神の背筋を伸ばして書き始めても、身体の背筋が丸まって、へなちょこ文章になってしまう。

○続いて安藤宏の言葉。

【客観をよそおいながら実際には特定の人物に共犯的に寄り添うことによって作中にはさまざまな魅力ある空白、ほころび、矛盾が生起し、「もうひとつの物語」が派生していくことになるだろう。“なりきり一目隠し”の法則からも明らかかなように、小説で問われるのは実は「何を描くか」よりもむしろ「何を描かないか」という問題なのである】

これも実に難しい。

私たちは、「何を描くか」という姿勢で書いているのであり、「何を描かないか」なら、はじめから書かないであろう。

だが、私たちは描き過ぎで大凡失敗をする。

バルザックの時代は、映画どころか写真もなかったので、あれだけ詳細に描いたのであるが、現代なら読者から、

「これだけ読まされるのは退屈。写真の一枚でもページに貼付けてもらったほうがいい」

と言われそうだ。

○次に松家仁之の言葉。

【接続詞のきわめて少ない小説をアリス・マンローは書く。ひとの心は「そして」あるいは「しかし」と一拍おくまもなく、動き、変わる、と知っているからだ。人生とはそのようなものであり、生きることの真実は、ためらいなく正確に、すばやく大胆につかみとらなければ、手もとからするりと逃げてしまう。マンローは実人生の痛みと歓びをとおして、それを学んだ】

これは、ノーベル賞受賞の女性作家、アリス・マンローの小説作法を語ったものである。

私なんかは、接続詞を使わないと先に進めないが、後から見直すと、大半が不要で、まどろっこしいリズムになってしまう元凶でもある。

○これは室生犀星の言葉

【小説というものは書けないからと言ってじっとしていると、百年経っても書けるものではない、書けない自分のなかに飛び込んで行って、書けるまで机をはなれずに自分をいじめあげると、白状しない罪人が鞭打たれる苦しさから何もかも言ってしまうように、やっと書けるようになるのである】

恐れ入りました。

「書けない、書けない」

と嘆いてばかりいる仲間を見ていると、机に向かっている事がない。

飲み屋のテーブルにばかりしばみついでいて、「書けない」もないものだ。

アルコールアレルギーで飲めない私も、せめて女にばかりしばみついで、「書けない」と口走ってみたいものだが、そういう女もない。

飲めない、いない、だから、机に向かうしかないのである。

○ごぞんじ小林秀雄の言葉。

【誤解されない人間など、毒にも薬にもならない。そういう人は、何か人間の条件に於いて、欠けているものがある人だ】

これは（誤解されてばかりいる）私を勇気づけてくれる。

書けば書くほど誤解されるわけで、それを怖れては書くことなどできはしない。

○芥川龍之介の、『小説作法十則』の一番目。

【小説はあらゆる文芸中、最も非芸術なるものと心得べし。文芸中の文芸は詩あるのみ。即ち小説は小説中の詩により、文芸の中に列するに過ぎず。従って歴史乃至伝記と実は少しも異なる所なし】

これも（歴史物を多く書く）私を勇気づけてくれる。

また「非芸術」でいいんだと居直れば、素直に簡潔に平明に書けるといふものだ。

○私が最も好きな哲学者、ショーペンハウアーの言葉。

【どんな作家でも、稼ぐために書きはじめたとたん、質が下がる。偉大なる人々の最高傑作はいずれも、無報酬か、ごくわずかな報酬で書かねばならなかった時代の作品だ】

これこそ（金にならない原稿ばかり書いている）私を勇気づけ、私の支えになっている言葉である。

「時代」とはどういう時代なのか。

おそらく人気作家になる前とか、人気作家だったがその座を降りた晩年時期とか、もしくは戦争などによって報酬に結びつかなかった時代を言うのだろう。

もちろん、「時代」が最初から最後まで続いた、カフカの例もあるのであるが。

ショーペンハウアーは、あれこれ外国の文豪の実態をよく知っていただろうが、私は外国の事は少ししか知らないので、日本の例をいくつかあげてみよう。

島崎藤村の『破戒』

小川国夫の『アポロンの島』

などは、自費出版である。

志賀直哉の『暗夜行路』

梶井基次郎の『檸檬』

埴谷雄高の『死霊』

などは、同人誌掲載である。

宮沢賢治

石川啄木

などは、生前原稿がほとんど売れなかった。

君よ、私よ、悲観することはない。

これらの事実は、己に鞭打つための、有力な理由になるではないか。

○次は、【小袈裟】という言葉。

「ちいさげ」

と読む。

「大袈裟」

ならわかるし、物書きはだいたいそうしたものだ。

読売新聞の、

「編集手帳」

で知った。

北原保雄編著、

『辞書に載らない日本語』

にあるとのこと。

意味は、

「深刻な出来事を、ささいなことであるかのように語ること」

おもわず唸った。

これは小説創りのコツではないか。

いままでの小説は、ささいなことなのに、大袈裟に語られていた。

それが小説家のつく嘘と言ってしまえばそれまでだが、これでどれほどの読者が騙されてきたのか。

なぜなら人生に於いて、大袈裟に語ることなぞ、ほとんどないのだから。

「大変な事件が起きた」

「驚くべき事実が判明した」

等々の表現がでてくる小説はかなりあるが、これは嘘というよりは、下手な、

「騙しのテクニック」

であり、安易な、

「予告編」

でしかないので、もうやめたほうがいい。

○最後は、良寛の『戒語』より。

良寛が言い遺し、貞心尼が録した、

『戒語・九十ヶ条』

を、私はよく読み返す。

読み返すほどに反省もし、納得もし、勇気づけられる。

なぜなら、そのうちの多くは（正確に数えたことはないが、ほぼ八割は）小説を書く心構えと同じものだからである。

十分の一ばかり、挙げてみよう。

【○ことばの多き

○さしたることもなきことをこまごまという

○よく心得ぬ事を人に教える

○ことごとしく物をいう

- 都言葉をしたり顔にいう、又いなか者の江戸言葉
- 手柄話
- 学者くさき話
- 風雅くさき話
- さとりくさき話】

最初のふたつは、安藤宏の、

「何を描かないか」

という言葉に通じる。

「よく心得ぬ事を人に教える」

に就いては、ヒラリズムでも書いているので、その前半を転載する。

(第七十六話 知識と知恵 より)

【とあるエッセイを読んでいたら、

「ポケモンGO」

のことが出てきて、

「ポケモンGOをやるために、ゲーム機を購入する」

とあった。

もちろん、それは間違いだ。

「ポケモンGO」

は、

「スマホのダウンロード」

で出来る。

間違いというよりも、知らない事を書いたから、ある意味必然的にこうなってしまう。

あえて知らない事を書くならば、

「知らない」

と書けばよいのだ。

他人事ではない。

司馬遼太郎などの大作家でも、こうしたミスをおかした事がある。

私たちは（特にモノを書く者は）知識人であるという、

「自負もしくは驕り」

があるし、知ったかぶりをしたいという、

「邪心もしくは童心」

があるし、読者の知らないはずの知識を教えたいという、
「欲望もしくはお節介」
がある。
そうして、あんがい、
「知らないものは知らない」
と言える、
「居直りもしくは知恵」
がない。
その知恵のなさが、つまらぬミスを招く】

なお、
「ことごとく物をいう」
については、
【小袈裟】
という言葉に通じる。

後半のいくつかは、現代の小説に多い。

なぜなら小説家に、大学の先生や、他の分野の芸術家や、宗教家が多くなってきたからであり、本当はそういう人は、大学の先生や他の分野の芸術や宗教を懸命にやっていたらいいのに、その懸命さがない証拠でもある。

だから、つまらない小説になる。

大学の先生は、小説で食えないから先生をやっている者が多く、小説で食えないからギャンブラーをやっている私には文句は言えない。

他の分野の芸術家は（芸人も）、その分野で一流になれそうもないので、小説でも書いて話題性を獲得したいのだから、その涙ぐましさに文句は言えない。

ただ、宗教家の小説家は、煩惱丸出しのはずの小説なんか書いて妙な気がする。

たとえば、坊主丸儲けなのに、芥川賞なんか貰って、相変わらず説教たれてる坊さんがいるが、宗教家としても小説家としても信用できない。

さて今日は（この今日は前の今日とは違って今の今日である）新作を書き始めるにあたって、こんな言葉を復唱したものである。

冗談。